

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

Regional Oral History Office(ROHO)のオーラルヒストリー・アーカイブについて

梅崎, 修 / UMEZAKI, Osamu / TAGUCHI, Kazuo / 田口, 和雄

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2012-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007841>

生涯学習とキャリアデザイン Vol.9
2011年度 法政大学キャリアデザイン学会紀要

Regional Oral History Office (ROHO) の オーラルヒストリー・アーカイブについて

Report on the Oral History Archives of the Regional Oral History Office (ROHO)

梅崎 修

UMEZAKI Osamu

田口 和雄

TAGUCHI Kazuo

2012年2月

〈研究ノート〉

Regional Oral History Office (ROHO) の オーラルヒストリー・アーカイブについて

法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修
高千穂大学経営学部教授 田口 和雄

1 本稿の目的

本稿の目的は、海外のオーラルヒストリー (Oral History) のセンターを紹介することである。われわれはカリフォルニア大学バークレー校 (University of California Berkeley UCB) の ROHO (the Regional Oral History Office) を訪問し、オーラルヒストリー・センターにおける調査活動と資料管理・公開について調査を行った。

近年、日本では、オーラルヒストリー研究が広く注目を集めている。オーラルヒストリーの第一の特徴は学際性にある。民衆史や社会史などで発展したマイノリティー・オーラルヒストリーもあれば、政治史や経営史で発展したエリート・オーラルヒストリーもある (詳しくは、大原社会問題研究所 (2009) を参照)。このような学際性は、優れた共同研究を生み出す可能性もあるが、同時に実際に研究を行う際の難しさもある。2003年には、日本オーラル・ヒストリー学会が設立され、研究交流が盛んに行われている。また、政治史の分野では、御厨貴氏が2003年からオーラルヒストリーの短期教育プログラムを開始し、その成果を御厨 (2007) としてまとめた。多くの既存の学界でも、オーラルヒストリーに関する研究発表が増えてきている (例えば、梅崎 (2012) 参照)。

ところが、このようなオーラルヒストリー研究の活性化の中で、最も遅れているのは、オーラルのアーカイブ化、つまり口述資料の管理・公開と

いう作業である。研究交流は、場所を持たずとも可能であるが、資料の保存となると、まず場所の確保が必要である。また、その管理・公開に関しては専門の人材が必要となる。端的に言ってしまえば、資金不足・人材不足からオーラルのアーカイブ化を進めることは難しかったのである。

もちろん、一部の研究者たちは、自主的な努力によって口述資料を冊子化し、大学図書館などに寄贈していた。例えば、御厨貴氏や伊藤隆氏によって進められた、文部科学省科学研究費補助金「C.O.E. オーラルヒストリー・政策研究プロジェクト」(2000-2004年度)の膨大なオーラルヒストリー群は、政策研究大学院大学の図書館によって保管され、外部からも資料検索が可能になっている¹⁾。

しかし、口述資料の公開は資金の面から難しさが伴う。印刷費用がかかるので、多くの口述資料が未公開の形で保存されていると考えられる。そもそも、口述資料の作成が研究業績としてあまり評価されない現状では、音声の書き起こしをするという労力が報われることは少なく、調査者の必要に応じて書き起こしをしない、もしくは部分的な書き起こしが行われることが多い。つまり、学界内に自分以外の研究者に資料を公開するインセンティブ・システムが存在しないのである。

ところが、オーラルヒストリーの更なる発展は、資料が広く公開され、資料批判が可能になる環境に依存すると言えよう。現在、オーラルヒス

トリーを使った研究成果が他の研究者によって資料を使って批判されるという文書資料ならば成立しうる研究環境が未整備である。実際のところ、多くの研究者がオーラルヒストリーの実証性に対して不信感を抱えているが、その不信感は口述資料そのものではなく、資料を取り巻く環境へ向けられるべきものである。梅崎（2012）でも確認したように、口述資料が主観的であり、文書資料は客観的という二項対立は未だ多い思い込みであるが、生産的な議論ではないと思える。もちろん、文書資料の方が固有名などは正確であり、口述資料には記憶の間違ひが多いのは事実かもしれない。しかし、そこから文書資料が客観的で口述資料を主観的と考えるのは飛躍しすぎである。口述資料において起こりうる偏りは文書資料でも起こり得る。むしろ、口述資料と文書資料の違いは、資料批判の可能性という研究環境の整備に依存している。研究のために批判しながら資料を利用できる環境があれば、オーラルヒストリーも多くの人々に利用されることになると考えられるが、その公開が進んでいないのが現状である。

欧米では、多くのオーラルヒストリー・センターが設立されているが、日本においてはオーラルヒストリーを実施し、口述資料を収集・管理し、なおかつ啓蒙・育成する拠点組織は未発展である。オーラルヒストリーを行う組織やデジ

タル・アーカイブの試みなどがあるが、未だ大きな発展を遂げていないと言えよう。数少ない事例としては、北星デジタルアーカイブ（HAD）が、オーラルヒストリーのインタビュー記録の映像・音声資料とその書き起こし文字資料（トランスクリプト）を収集し、ウェブ・アーカイブとして公開している²⁾。これらの現状は、むしろ資金面の壁が大きいからと言えよう。しかし、資金問題以外にも拠点化の具体的な方法がわからない、または拠点化による多くの利点が理解されていない可能性も高い。それゆえ、われわれは、2011年8月22日にアメリカの先進的なオーラルヒストリー・センターである UC Berkeley-ROHO を訪問し、拠点化、資料の概要、教育、保存・公開などについて調査した。調査にあたっては、ROHO の Director であり、UCB の歴史学部教授である Richard Cándida Smith 氏、Associate Director の Victor W. Geraci 氏、Research Specialist で San Francisco State University でも教鞭をとる Martin Meeker 氏、Research Specialist で UCB の歴史学部の院生である Samuel James Redman 氏、さらに ROHO の Website/Video の Director である David Dunham 氏にお時間を取っていただき、それぞれの仕事内容についてお話しいただいた（写真1）。本稿は、その調査報告である。

写真1 Bancroft Library の前の集合写真



2 組織概要

ROHO は、1952年から発足準備を進められ、1954年に設立された³⁾。全米では、コロンビア大学が1948年に設立した University Center for Oral History (CCOH) に続く全米で2番目に早い設立であった。3番目は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の Center for Oral History Research である⁴⁾。設立以降、政治、法律、文芸、経営および労働、社会とコミュニティー史、カリフォルニア史、天然資源および環境、科学技術などの様々な専門分野でインタビュー調査が行われてきた。UCB には、複数の図書館があるが、ROHO は The Bancroft Library に付設された調査機関である。この図書館は、アメリカの歴史家・作家であった Hubert Howe Bancroft (1832-1918) の個人図書館を UCB が購入したのがはじまりである。Cándida 氏によれば、Bancroft 氏は、当時アメリカ史を調べるために速記者を同行させ、インタビュー調査を行っていた。当時は、オーラルヒストリーは認知されていなかったが、彼は、オーラルヒストリアンであった。

ROHO は、オーラルヒストリーの実施、教育、および保管・公開を行っている。全米を調査の対象としているが、特にカリフォルニアのあらゆる分野の調査が行われている。設立当初は、農業、経営、政治などのエリート・オーラルヒストリーが中心であったが、徐々に他分野にも対象を広げていった。マイノリティー・オーラルヒストリーは新しく、ここ10年で増えてきた。その他、食品産業、化学産業、高等教育の歴史などもある。これらの口述資料は、音声、トランスクリプト、映像などで保存されており、学術論文、学位論文、本、記事、およびビデオおよびフィルム・ドキュメンタリーのための資料として使用されている。

ROHO の代表は、Richard Cándida Smith 氏であり、Research Specialists が6名、Affiliate Scholars が4名、Graduate Student Researchers and Interviewers が6名、Production が3名であり、合計20名のスタッフが所属している。ス

タッフは、歴史学を専門にしている者が多い。Director と Associate Director には、大学から給与が出ているが、他のスタッフの給与は外部資金によって成り立っている。

3 コレクション紹介

これまで収集された口述資料の数は膨大である。3000名におよぶコレクションがある。1名に対して複数回のインタビューを実施し、時間になると個人差はあるが延べ5～10時間である。短いものには2時間、長いもので50時間である。なお、コレクションは膨大であるが、聴き手の能力によって質的にはばらつきがある。また、現在は音声、映像、テープ起こしの三つを保存しているが、1940～60年代は対象者の回顧録を書く目的でオーラルヒストリーが行われたので、編集が終わると、カセットテープを再利用していた。そのため、音声は残っていないことも多い。当時は、カセットテープが高価だったのである。

ROHO では、増加し続けているコレクションの分類について苦勞している。約20年ごとに分類方法を変更している。現在は、表1に示したように分野別プロジェクトごとに分けられている。これらの多くは、ウェブ上で公開されているので、分野を選び、プロジェクトを選び、人名を選ぶという流れで口述資料を見る、聴く、読む（もしくは申し込む）ことができる。また、古いものや未公開のものも含めてオーラルヒストリーは、簡易製本して図書館内の資料室に保管されている（写真2参照）。

ここですべて分野を詳細に説明することはできないが、ROHO が特に力を入れている珍しいコレクションを紹介しよう。ワイン・食品産業のオーラルヒストリーである。過去40年間、ROHO は食品・ワイン産業の発展に寄与した200名のワイン醸造専門家、シェフ、レストラン店主、農民、販売業者、店所有者、教育者、研究者、業界リーダー、組織職員および作家をインタビューしている。

さらに、いくつかの口述記録群に関しては、再編集をして商業出版物を刊行している。たとえば、Meeker氏は、オークランドにあった軍事基

地の生活をインタビューして、Martin Meeker (Editor) “The Oakland Army Base: An Oral History”2010, The Bancroft Libraryをまとめた。

表1 コレクションの分類

Arts and Literature	Artists with Disabilities
	Architecture and Landscape Architects
	Art, Sculpture, and Photography
	Books and Fine Printing
	Community-Based Artists
	California Afghan Artists
	Fiber Arts
	Music and Dance
	Production and Presentation
	Poetry and Literature
	SFMOMA
Business	Business History
	Venture Capitalists
	Western Mining in the Twentieth Century
Community History	AC Transit
	California-Russian Emigre Series
	Education
	Girls' Club, San Francisco
	Hungarians under Communism and Capitalism
	Italian-Americans From Northern California
	Individual Community Oral Histories
	Jewish Community Leaders of the San Francisco Bay Area
	Oakland Army Base
	Philanthropy
	Portuguese in California
	Richmond Community History Project
	Rosie the Riveter World War II American Homefront Project
Food and Wine	America's Wine: The Legacy of Prohibition
	California Wine Industry
	Food and Food Ways
Law and Jurisprudence	California Supreme Court
	Individual Memoirs
	Law Firms
	Legal Education
	U.S. District Court for Northern California
	U.S. Supreme Court
Natural Resources, Land Use, and The Environment	Agriculture
	Forestry and Soil Science
	Horticulture, Botany, and Landscape Design

	Land Use Planning
	Parks and the Environment
	Sanitary Engineering History
	Seismic Safety
	Sierra Club History
	United States Forest Service Region 5 Oral History Project
	University of California Agriculture and Natural Resources
	Water Resources in California
Politics and Government	California State Archives Oral History Program
	California Women Political Leaders
	Earl Warren Era in California, 1925-1953
	Goodwin Knight and Edmund G. Brown Eras in California, 1953-1966
	Human Rights/Relations Commission
	Individual Memoirs
	Ronald Reagan Era in California, 1966-1974
	Slaying the Dragon of Debt: Fiscal Politics and Policy from the 1970s to the Present
	Suffragists
Science, Medicine, and Technology	AIDS Epidemic in San Francisco
	Bioscience and Biotechnology
	Chemistry and Physics
	Engineering
	Kaiser Permanente Founding Generation
	Kaiser Permanente 1970 - Present
	Medical Physics and Biophysics
	Medicine and Public Health
	Ophthalmology
	Stem Cell Research
Social Movements	Disability Rights and Independent Living Movement
	Labor Movement
	Organizations and Issues of the Blind, 1880s-1950s
	Social Welfare History
	Self-Advocacy Movement
	Volunteer Leadership
University of California History	Anthropology
	China Scholars
	Department of History, UC Berkeley
	Exploring Diversity and Access at the University of California
	Faculty, Administrators, and Regents
	Library School
	Office of the President
	University of California Agriculture and Natural Resources
	University of California Alumni

写真2 資料室写真



4 体制と方法

本節では、インタビュー調査より明らかになった ROHO におけるオーラルヒストリーの運営体制と具体的方法について紹介する。

(1) プロジェクトの運営体制

オーラルヒストリーは、プロジェクトベースで実施されている。はじめに、新しいプロジェクトの企画が通ると、調査テーマに合わせて外部から参加できる専門家を探す。内部スタッフと外部専門家でチームが作られる。たとえば、Meeker 氏が担当している現在進行中の米国連邦政府の債務危機のプロジェクトでは、調査開始の18ヶ月前から資金集めと調査者を探し始め、テーマに関係する論文や資料を読んでいる。事前打ち合わせを兼ねた勉強会を毎週開催し、プロジェクトのイメージを共有した。他のプロジェクトでも同じように運営されている。

ROHO のスタッフも、資金集めには苦労している。たとえば、連邦政府債務危機のプロジェクトでは、民主党支持の企業家からの寄附があった。多くの外部からの寄附が調査を支えていると言える。その他、国立公園局やオークランド市、さ

らに農務省からプロジェクト資金を得ている。調査テーマを絞った寄附もあれば、調査に使ってもらえれば、特にテーマにはこだわらないという寄附もある。さらに、スタッフの方が参加したプロジェクトについて具体的に説明を受けた。以下では、それらを説明しよう。

第一に、Meeker 氏は、コミュニティの高齢化の歴史をテーマにしたプロジェクトを行っている。調査対象候補者を絞り込み、プレ調査を行い最終的な調査対象者を選定した。宗教、倫理観等を考慮しながら新しい知見を得られそうな人を選んだ。

第二に、Dunham 氏は、1994年にサンフランシスコの港湾で起きた爆発事故について調査した。当時、港湾に勤めていた従業員のほとんどがアフリカ系黒人の陸軍退役者であった。このプロジェクトを行うために、院生に調査スタッフを依頼した。また、この他にカリフォルニアを中心とした WW II American Homefront プロジェクトを実施している。これは国立公園局から依頼された調査である。国立公園局自身は定期的にプロジェクト調査を依頼している。最初、調査はリッチモンドに限られていたが、その後は全米に拡大していった。

第三に、Geraci氏は、現在アイスクリーム産業を対象にしたオーラル調査を計画している。彼自身は、ワイン・食品産業のオーラルヒストリーを続けてきたが、アイスクリーム産業は初めての調査で知識が少ないため、事前調査を4ヶ月前から開始して今も文献調査を行っている。

(2) インタビューの方法と教育

続いて、実際のROHOのインタビュー手法とインタビュアーの育成について説明する。まず、調査の下調べや事前勉強会でプロジェクトのイメージが共有されると、調査対象者の選定を行って、調査協力の依頼状を送るが、依頼状を出したほとんどの人は調査協力を承諾してくれると言う。高い成功率であると言えよう。

平均的なインタビュー調査は、聴き手2人がペアになって実施する。1名がメイン・インタビュアーであり、もう1名はビデオ撮影とサブ・インタビューを担当する。インタビュアーが、御厨(2007)などで主張される人数(平均3名)よりも少ないが、これは映像撮影を考えた結果かもしれない。

ROHOでは、インタビューに際しては、ライフストーリー研究などで用いられている語り手に自由に回想し、語ってもらう手法を採用していない。仮説に基づいて質問をする仮説検証型のインタビューを取り入れている。特に大型プロジェクトでは、複数の調査対象者に仮説検証型の質問を投げかけている。調査前に複数の仮説を考えていると言う。

このような仮説検証型の方法は1940年代から用いられており、特定のテーマに対して対象者と一緒になって考えながらインタビューを行っている。このような手法をROHOが採用している理由は、ROHOがエリート・オーラルヒストリーよりはじまったからであり、歴史学者中心で組織されているROHOでは、社会学のような意味解釈の手法よりも資料批判を軸とした実証主義が根付いているからと考えられる。ROHOが文書資料を集め、事前下調べを充実させているのも歴史

学の特徴と言えよう。彼らは、オーラルヒストリーは学際的な分野であるが、歴史学者をメインと考えていると語っている。例えば、エコノミストが他のエコノミストにインタビュー調査を行ったことが、結果的に内々の話になってしまい失敗した。彼らは、専門知識だけでなく、「歴史資料を作成するという意識」が必要になると言う。

もちろんROHOでも、場合によっては、自由面接法でインタビューを行うこともある。Long Life Historyプロジェクトでは、カリフォルニア市の前市長に対して自由面接で語ってもらっている。ただし、プロジェクトの中では、インタビューを通じて選挙民の意識の変化をどうとらえているかという仮説を立てている。

ところで、映像撮影のありなしでは、インタビューのやり方はあまり変わらない。ビデオ撮影時、開始当初の10～20分程度、語り手は緊張しているが、その後は忘れたかのように語っている。ビデオが一般家庭に普及しているので、撮られるのに慣れているのではないかと言う。なお、撮影機材の置き方には工夫が必要である。ビデオはテーブルの脇に置いて語り手の視野に入らないように工夫している。一方、音声録音機は小さいが、語り手と聴き手の真ん中に置くため、語り手が気になることもある。

インタビューの技量に関しては、彼らも強い関心を持っている。Geraci氏によれば、インタビューの質を上げるには、専門知識はもちろんであるが、オーラルヒストリーの調査をどのくらい理解しているかが重要である。語り手が話す内容には、本音を語る場合と、表面的なことしか語らない場合とがあり、聴き手には本音を引き出す技量が求められていると言う。

では、どのような訓練でインタビューの技量が身につくのであろうか。インタビューの技能は一夜で身につけることはできないと主張する。彼らが経験知として語ったのは、インタビュー終了後、参加者で反省会を行い、どの質問が良かったのか、あるいは悪かったのかを議論することの重要性である。反省会の結果を次の調査にフィードバック

しながら調査の質を高めていくのである。あるプロジェクトでは、8ヶ月間で26回のオーラル調査を行い、反省会を行っている。さらに研究のためにだけでなく、オーラルヒストリー・メソッドの習得のためにも、学生が主体の調査プロジェクトもある。

インタビューの Magic Trick と呼ばれている方法もいくつかある。それは、インタビュー調査中で、テーマに関する知識を持っていることを語り手に伝えることである。また、人物の名前、書籍のタイトル等を取り上げて具体的に質問すると、語り手から本音を引き出すことができる。これらの工夫は、日本のオーラルヒストリアンによっても語られている（御厨（2011）参照）。同じ経験は同じ知恵を生み出すと言えよう。

また、ROHO は、インタビューに参加しながらの経験学習だけではなく、多くの初心者に向けて夏休みに大学内セミナーも行っている。今年のセミナーでは、1週間で約40名が参加している。主に歴史学を研究している大学院生や歴史教師などが参加した。具体的には、参加者がペアになり、自己紹介し、相互インタビューをさせている。また、かつて学生としてこのセミナーに参加した Redman 氏によると、ここでインタビュー映像を見る機会があり、とても勉強になったと言う。

ところで、アメリカの歴史学界の中でもオーラルヒストリーを研究手法として低くみる傾向があり、特に教育としては整備が遅れていると彼らも認めている。Redman 氏は、UCB の大学院で多くの歴史学の授業を受けているが、アメリカ史という授業の中でオーラルヒストリーが簡単に紹介されたただけであった。未だ UCB には、オーラルヒストリーという連続授業はない。大学院の中にオーラルヒストリーの教育プログラムが設置されているのはコロンビア大学だけである。

以上のようにインタビュー・メソッドは様々ある。ただし、歴史学者である ROHO のスタッフは、インタビューの訓練の重要性は理解しているが、歴史的な考え、語り手に関する背景の知識、歴史家としての考え方が重要であると主張してい

る。大学院生のトランスクリプトを読むと、内容のレベルがすぐにわかると言う。しっかりと準備しているオーラルヒストリーの質は良くなる。

(3) 資料管理・公開方法

現在、ROHO は、口述記録は音声、映像、トランスクリプトの三つの媒体で保管している。かつてはトランスクリプトだけが保管された調査も多い。ROHO では2～3年前からトランスクリプトをプロの業者（数名）に依頼している。トランスクリプトは、音声や映像に対しては、二次的資料の位置づけにある。その他、口述記録にはインタビュー時の写真を掲載している。たとえば、WW II American Homefront プロジェクトでは、当時の写真を借りてスキャナーで取り込み掲載した。

トランスクリプトは語り手に確認してもらうが、その基準はプロジェクト・語り手ごとで異なり、個別に交渉しながら編集をしている。まず、トランスクリプトは聞き手が内容を確認してから語り手に送る。語り手が公開してほしい部分に印をつけてもらう。また、音声記録の場合、編集が難しいが、現在はシール（聞こえないようにする）をつけている。このシールには、公開する日付を具体的につける。このようにシールという編集が可能になったことで全削除がなくなったと言える。

現在、音声にシールを希望する人は3～5%である。80年代には20%と多かった。シールは法律に基づいて裁判所の要請があれば公開する。語り手はシールを貼りつづけるのに限界があることを理解している。シールをしておく期間は平均すると10年程度であり、期間を超えると、全て聞くことができる。

語り手が話す内容をテープで聞く時、話す内容に矛盾がないと感じていても、トランスクリプトを読み返すと矛盾する部分がある。その場合は、ROHO 側で文章を修正している。このようにトランスクリプトの内容を事前に編集するのは2つの目的がある。一つは語り手が発言内容を読み返

して公開することを拒否することを避けるため、もう一つは公開したトランスクリプトを他の人が読んだ際に読み間違えることを避けるためである。

なお、トランスクリプトを語り手に確認してもらう場合、なるべく少しの修正で済むように手紙に記載している。しかし、なかには多くの箇所を削除を希望する語り手もいる。その場合、連絡をとって少なくするようにお願いするが、最終的には語り手の意向に従う。例えば、WW II American Homefront プロジェクトの場合、ほとんどの語り手（95%）が少しの修正で了解し、残りの5%の語り手が自らが語った内容にショックを受け、編集を希望してきた。

トランスクリプトの利点の一つは、検索機能である。データ化すれば、文字検索が可能になる。音声や映像では検索機能を付けるのは費用がかかると言えよう。彼らも、映像に字幕を付けたいが技術的に難しいと言う。

特に注目すべき ROHO 流のトランスクリプトの方法として、発言ごとにタイムコードを付けることがあげられる。タイムコードを付けるためには労力もかかるが、利点も大きい。音声や映像の中で必要箇所を探したい場合には、まずトランスクリプトを読んで探し、その上でその発言のタイムコードを確認すればよいのである。また、最初に発言ごとにタイムコードが付いていれば、語り手が大幅な編集を行った場合、発話と発話の間の時間が不自然に長くなるので、編集の作業がわかる仕組みになっている。

口述資料の保管・公開と同時に重要であるのは、語り手の契約、特に著作権の問題である。ROHO は、調査した内容（トランスクリプト、音声、映像）を一緒に公開したいと考えており、依頼時にその旨を伝えている。人権保護局に基づいたルールがあり、調査開始前に語り手にインフォームド consent で説明書を付けることが求められている。その内容は、①語った内容を削除できる権利、②音声にシールを付ける権利、③プロジェクト終了後の公開前に記録の公開を中止させる権利であ

る。この利点は語り手が安心してオーラル調査に臨めることであるが、この欠点は稀に途中で中止する人がいることである。

ROHO として発行する著作権の契約書の一部を以下に抜き書きした。著作権に関わる説明はシンプルで「大学の研究・教育に使うことを目的としている」である。

I, _____ (name), do hereby give to The Regents of the University of California for such scholarly and education uses as the Director of The Bancroft Library shall determine the following tape-recorded interview(s) recorded with me beginning on _____ (date(s)) for The Bancroft Library as an unrestricted gift and transfer to the Regents of the University of California legal title and all literary property rights including copyright. This gift does not preclude any use which I may want to make of the information in the recordings myself.

This agreement may be revised or amended by mutual consent of the parties undersigned.

なお、完成したトランスクリプトを語り手に確認してもらう時には「公開を拒否する権利がある」ことを最終確認している。これまでこの段階で拒否した人は1、2人である。

ところで、インフォームド consent は連邦政府の法律に基づいているが、ROHO としては著作権よりも人権保護を重視している。アメリカではインタビューしたときに「××氏はギャングだった」というのは名誉毀損にならない。しかし、「〇〇氏はお金を盗んだ」とか「□□氏は△△氏に殺人を命令した」等は名誉毀損となる。例えば、政府関係者はストレスを多く抱えて仕事をしているため、インタビューの中で「〇〇氏の娘は麻薬中毒者だった」と語った。語り手本人としては問題なかったが、その後、名誉毀損として訴えられ、結果的に削除となった。

5 結語

本稿では、University of California Berkeley (UCB) の ROHO (the Regional Oral History Office) を訪問し、先進的なオーラルヒストリー・センターの取り組みを紹介した。ROHO において、膨大な調査を実施し、それらの資料を保管・管理・公開し、多くの学術研究に役立っているという活動は運営の工夫によって成り立っていた。本報告では、それらの具体的な工夫を紹介した。

オーラルヒストリーは、歴史学の中でも古くて新しい手法と呼ばれる。オーラルヒストリーが紹介される前から、民俗学や民衆史の分野で聞き書きの伝統があったからである。しかし、聞き書きは、学術研究の中で一定の位置を占めるまでに至らなかった。今回のインタビュー調査でも、オーラルヒストリーが定着しているアメリカでも学術的な手法として認知されるまでには時間がかかったという発言があった。

過去の聞き書きと現代のオーラルヒストリーを分ける最も大きな基準は、インタビューの手法ではなく、むしろ上記のような支援体制の有無であると考えられる。多くの研究者にも開かれた形で歴史資料が利用できる拠点が学問発展のためにも重要なのである。ここでの調査報告は、今後日本でオーラルヒストリーの拠点づくりを考えている人々にとって役立つと考えられる。特に、日本ではオーラルヒストリーは注目されているが、その支援体制は未整備のままなので、本稿の情報価値は高いと言えよう。なお、欧米には、他にも数々

のオーラルヒストリー・センターが存在する。それらの紹介については、今後の調査課題としたい。

謝辞 本研究は、科研費「戦後労働史研究におけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の基礎的研究（基盤研究 (B)）」の成果である。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 政策研究大学院大学図書館ホームページ (<http://www3.grips.ac.jp/~oralreport/>)。
- 2) 北星デジタルアーカイブ／オーラル・ヒストリー・インタビュー (<http://www.ipc.hokusei.ac.jp/~z00398/digitalarchives/index.html>)。
- 3) ROHO のホームページ (<http://bancroft.berkeley.edu/ROHO/>)。
- 4) UCLA Center for Oral History Research の調査については、別稿で報告する。

参考文献

- 梅崎修 (2012) 「オーラルヒストリーによって何を分析するのか？—労働史における〈オーラリティー〉の可能性」『社会政策』(掲載予定)
- 大原社会問題研究所編 (2009) 『人文・社会科学研究とオーラルヒストリー』御茶の水書房
- 御厨貴編, 2007, 『オーラル・ヒストリー入門 (岩波テキストボックス)』岩波書店。
- 御厨貴 (2011) 『「質問力」の教科書』講談社

Report on the Oral History Archives of the Regional Oral History Office (ROHO)

UMEZAKI Osamu
TAGUCHI Kazuo

The purpose of this paper is to examine the operations of an overseas oral history unit - the ROHO at University of California at Berkeley. We visited the Regional Oral History Office (ROHO), which is based at the University of California at Berkeley (UCB), to study investigation activities, management, and method of public presentation of data in an oral history center. The effectiveness of the ROHO's work results from the expertise

of their management. This report documents our careful investigation of their practical expertise. We believe our report will be useful to people who are planning to start a full-scale oral history center in Japan. Although there is a considerable interest in the concept of oral history in Japan, the necessary infrastructure is currently undeveloped. Given the situation in Japan, we believe the information contained in this report is of a substantial value.